

# 那賀町子ども読書活動推進計画

～子どもたちひとり一人を読書力で豊かにはぐくむ～



平成28年3月



那賀町教育委員会

## はじめに

読書活動は、子どもがことばを学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことができないものと「子どもの読書活動の推進に関する法律」に規定されています。

私たちが社会で生きていくためには、言葉を正しく理解し、相手に自分の考えを伝えられること、また、相手の思いを聞き取ることができる力が必要です。その力の源が読書活動であると思います。

最近、東京へ出張する機会がありました。その時、地下鉄の電車の中で、異様な光景を目にしました。座っている客の大半は黙って、スマートフォンの操作に夢中になっていました。その車内を見回しても読書をしている客は一人としていません。10年前とは様変わりし、時代の変化を感じました。

その生活様態の変化が、出版業界にも影響を及ぼし、販売額はピーク時より40%減少、また、書店の数も10年前と比べて25%減少していると推計されています。社会を生き抜く力を身につけるために、子どもたちの読書活動の推進は重要で大きな意義があると考えていますが、現代の子どもたちを取り巻く生活環境は携帯電話、インターネット等の情報メディアの急速な普及により変化を続けており、大人だけでなく、読書の習慣が身に付いていない子どもたちが増えてきています。

こうした状況を改善するには、家庭、学校、地域が連携して、読書活動の推進の機運を高める環境づくりを早急に推進する必要があります。

現在、小・中学校では、1日10分以上の読書時間の設定、地域ボランティアグループの読み聞かせや読書感想文の発表会を行う等により、効果を上げています。

那賀町教育委員会は、その効果をより高めるために「那賀町子どもの読書活動推進計画」を定めました。今後この計画を達成するために、「子ども園」、「小・中学校」、「図書館」等への蔵書を充実するとともに、学校（園）、家庭、地域及び関係団体との連携を強化し、すべての子どもが、いつでも、どこでも自主的に読書活動ができる環境を整えてまいります。そのことにより、子どもたちに社会で生き抜く力を醸成していきたいと考えています。

平成28年3月

那賀町教育委員会

教育長 尾崎 隆敏

# 目 次

第1章	那賀町子ども読書活動推進計画の策定にあたって	
1.	推進計画策定の趣旨	3
2.	基本方針	3
3.	推進計画の体系と期間	4
第2章	子どもの読書活動の現状と課題	
1.	家庭における子どもの読書活動の推進	6
2.	地域・ボランティアにおける子どもの読書活動の推進	7
3.	こども園における読書活動の推進	10
4.	小学校・中学校における読書活動の推進	11
5.	高等学校における読書活動の推進	14
第3章	学校・家庭・地域の連携による子どもの読書活動の推進	
1.	学校・家庭・地域の連携・協力体制	15
2.	推進のための取り組み	15
3.	数値目標	15
第4章	方策の効果的な推進のために	16
【 資料 】		17
①	那賀町子どもの読書活動推進におけるアンケート調査	
②	平成13年12月「子どもの読書活動の推進に関する法律」	
③	那賀町子どもの読書活動推進協議会委員名簿	

# 第1章 那賀町子どもの読書活動推進計画の策定にあたって

## 1 推進計画策定の趣旨

読書活動は、子どもの成長にとって、人生を心豊かに生きていく上で、かけがえのないものである。しかし、近年、インターネットをはじめとする情報メディアの急速な発達や普及により、子どもたちの「活字離れ」「読書離れ」が進んでいるといわれている。

このような中で、国においては平成13年12月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布・施行された。平成14年8月には「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」が、さらに平成20年3月には第2次計画、平成25年5月には第3次計画が閣議決定され、家庭・学校（園）・地域・国・地方公共団体の連携をさらに強化し、子どもの読書活動の推進を図る重要性が強調されている。

徳島県でも、平成15年11月に「徳島県子どもの読書活動推進計画」を策定し、平成21年3月には第2次計画、平成26年10月には第3次計画が策定された。

こうした中、那賀町においても、国の「子どもの読書活動推進基本計画」及び「徳島県子ども読書活動推進計画」を基本とするとともに、「那賀町総合振興計画」「那賀町第1次教育振興計画」のもと、「子どもの読書に関するアンケート」の調査結果をふまえ、未来を担う子どもたちが、読書を通して、ことばを学び、感性を磨き、表現力と創造力を高め、人生をよりよく豊かに生きていく力を身につけられるような環境づくりを、町民全体で積極的に推進するため、「那賀町子ども読書活動推進計画」を策定した。

## 2 基本方針

子どもの読書活動を推進するため、4つの基本方針を掲げる。

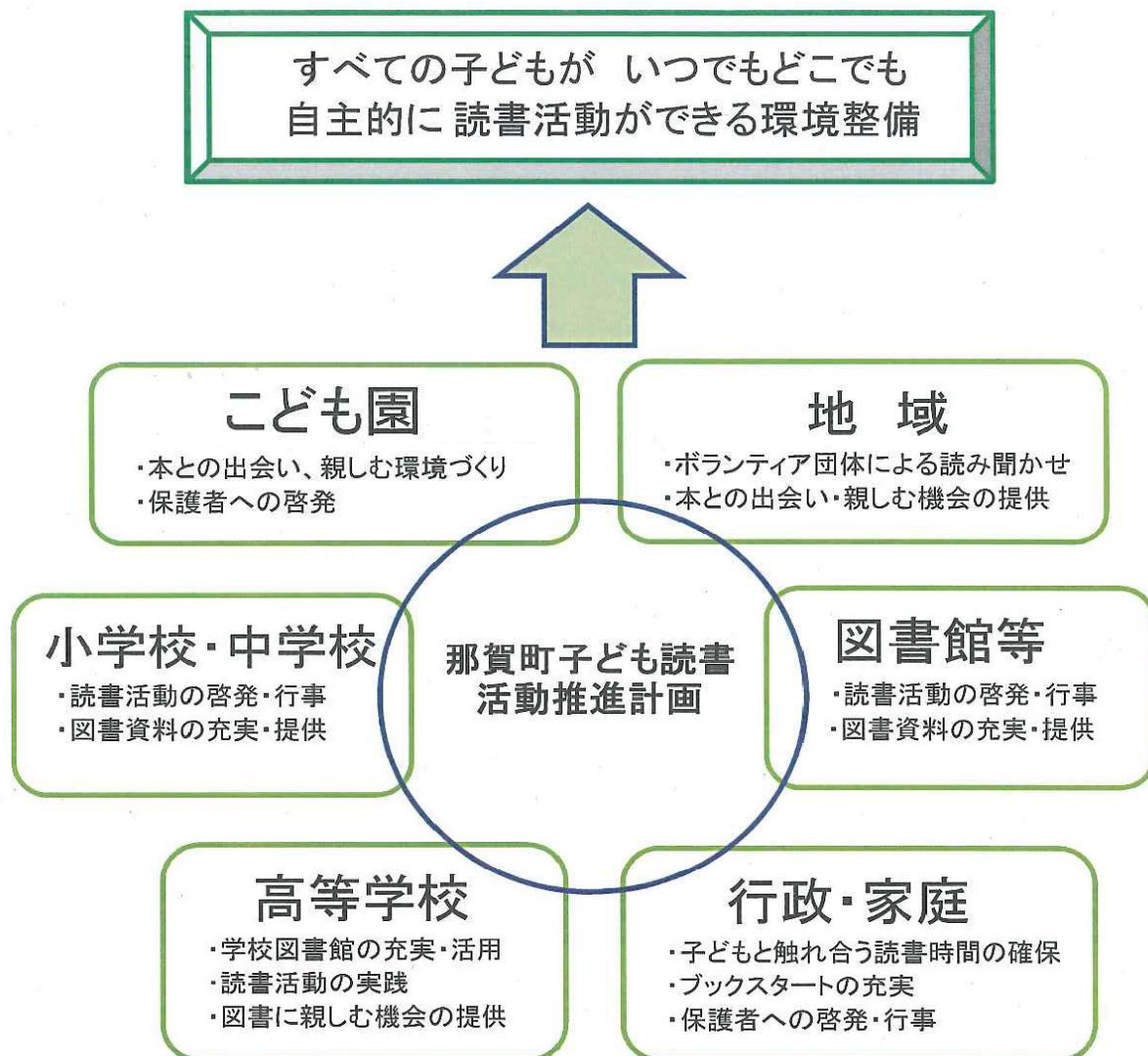
- ① 子どもが読書に親しむ機会の提供に努める。
- ② 子どもの読書に親しむ環境の整備に努める。
- ③ 家庭・地域・図書館・学校等の連携を強化する。
- ④ 子どもの読書活動に関する啓発広報活動を推進する。

この計画は、「子どもの読書活動の推進に関する法律」第8条に基づく国の基本計画「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」及び第9条第1項に基づき策定するもので、那賀町における子どもの読書活動の推進に関する施策の基本的方向を示し、市民との協働により社会全体で積極的に推進するものである。

### 3 推進計画の体系と期間

この計画の対象は、0歳児から概ね18歳までの子どもとする。ただし、取組については大人を含むすべての町民により行う。

計画の期間は、平成27年度から平成31年度までの5年間とし、必要に応じて見直しを行うものとする。



## 第2章 子どもの読書活動の現状と課題

那賀町では、子どもの読書活動の現状を把握するとともに、子どもの読書活動に影響を与える要因との関連性を分析するため、町内小・中学校の児童・生徒と高等学校の生徒を対象とした、「子どもの読書活動に関するアンケート」を実施した。

「子どもの読書に関するアンケート」では、72%の子どもたちが「読書が好き」と答えている反面、28%の子どもたちが「読書が嫌い」という結果が出ている。

小学生では「読書が好き」という子どもが8割近くいるが、中学校では7割、高等学校では6割、学年が上がるほど、読書離れがすすんでいるという結果になっている。

また「読書が嫌い」という理由の中で、「テレビやゲーム、マンガや雑誌の方が好き」「読みたい本がない」という事以外に、学年が上がるにつれ「活字を読むのが面倒くさい」という理由が増加している。

### ●読書アンケート集計結果

(対象・那賀町内の小学校・中学校・高等学校全生徒)

読書が好きですか。	小学校	好き 75%	嫌い 25%
	中学校	67%	33%
	高校	63%	37%

「嫌い」を選んだ理由は何ですか。	小学校	テレビやゲーム、マンガ雑誌の方がいい 35%	勉強やスポーツ、部活が忙しい 14%	読みたい本がない 21%	本が嫌い 10%	活字を読むのが面倒くさい 19%	その他 1%
	中学校	44%	12%	17%	9%	14%	5%
	高校	37%	15%	16%	10%	19%	5%

## 1 家庭における子どもの読書活動の推進

子どもの読書習慣は、家庭の中で親と子のふれあいの中から生まれてくる。特に、乳幼児からの読み聞かせは、読書習慣の形成だけでなく、子どもの心身の発達、親子の良好な関係づくりにも大きな影響を与える。

家庭での読み聞かせや、読書のきっかけづくりとその継続への支援を通し、家庭ぐるみの読書活動を推進する。

子どもが読書に親しむための基礎づくりは、まず家庭の中で言葉にふれる体験を重ねることから始まる。乳幼児時期の周囲の大人たちからの語りかけによって言葉と出会い、絵本の読み聞かせによって本を読む楽しみや喜びを体験する。

また、那賀町では、平成27年4月から旧あい幼稚園の施設を利用した「那賀町地域子育て支援センター」をスタートしている。

この施設は、子どもと保護者が一緒に利用する施設であり、地域の子育て支援の拠点となるような取組や地域の身近なところで、気軽に親子の交流や子育て相談ができるような支援を図ることを方針としており、ここでも読書に親しむための基礎づくりの機会を与えている。

### ① 現状と課題

核家族化が進む中で、保護者が子どもに関わる時間が減少しており、十分に読書に親しむ環境が整っているとはいえない。子どもたちは趣味やスポーツ・習い事・学習塾等に費やす時間が多くなっており、ますます読書に対する関心も薄くなり、読書離れが進んでいる。

読書が子どもの成長にとってどんな意義があるのか、またどんな重要性があるのか、まず保護者自身が十分に認識・理解し、家庭において保護者と子どもがともに読書を楽しむ環境をつくるのが大切である。

絵本に関心のある保護者は、多いように感じられる。支援室の絵本を手に取り、子どもに読み聞かせをしてあげたり、子どもが持ってきた絵本のページをめくりながら絵を見せてあげたり、言葉を添えてあげたりしながら、親子で絵本に親しんでいる姿をよく目にする。

子どもの成長発達のなかで、言葉の発達、感性の豊かさや情緒の安定、親子の愛着関係など、絵本には様々な意義があることを伝えるようにしている。

0歳から3歳くらいまでの絵本が少ないので、絵本を厳選しながら蔵書を増やすとともに、職員のスキルアップに努め、絵本のすばらしさを伝えていく必要がある。

### ② 取組

○年に1回、乳児相談時にブックスタート事業を推進している。

○毎月の相談や健診時には、心の栄養にかかすことのできない絵本の大切さを、保護者に伝え心身の健康づくりに努める。

○毎月開催する「おはなしボランティア」の絵本の読み聞かせにより、親子で様々な絵本に親しみ、楽しむ機会をつくる。

○年1回、外部講師を招き、子育ての中で絵本に親しみ、楽しむ体験が、子どもの成長発達に意義のあることを伝え、学ぶ機会を持つ。

○年齢に応じた絵本の推奨や、子どもの興味・関心に応じたお薦め絵本などの、情報提供に努める。



## 2 地域・ボランティア等における読書活動の推進

地域において、子どもの読書活動を進める拠点のひとつが図書館であるが、アンケートをとった結果「学校の図書室を利用する」という子どもは、全体の約89%いるが、「図書館（図書室）を利用する」という子どもは53%というものであった。

子どもが本に接するために、まず図書館に来てもらうことと、図書館が子どもにとって好きな場所であることが必要である。図書館が、子どもたちの居場所であり続けるために、子どもたちが読みたい本がそこにある、子どもたちが気軽に來ることができる身近な図書館を目指さなければならない。

また、公民館や美術館、放課後子どもクラブなどでも、読み聞かせによるボランティア等の協力もあって子どもの読書活動を進めており、相互の効果的な連携により、地域社会全体で読書活動の推進を図っている。

### (1) 図書館等における読書活動の推進

#### ① 現状と課題

最大の課題は、どのようにすれば全町に均質なサービスを提供できるかということである。実際には、隣接する阿南市や、美波町の図書館を利用するケースが多く、「貸出カード」も現実に対応できる発行制度となり、驚敷図書室、各支所、平谷出張所を通じて、全町の貸出サービスと広報活動を継続している。

読み聞かせボランティアグループの活動を支援するため、積極的に県立図書館作成の資料を提示したり、取り寄せサービスを行ったりしている。

話題の本や、おすすめの本を定期的に提示して読書意欲を促している。また、ケーブルテレビでも新着本の紹介を行っている。

#### ② 取組

##### 図書館

- 開架閲覧室に児童書コーナーがあり、専用の椅子を備えている。絵本のほか、紙芝居、物語、児童百科事典など、ヤング・アダルト向けの図書を含めると、約1万冊の児童書を利用者の閲覧と貸出に供する。
- 広報活動は、現在、「広報なか」に簡単な新着本案内を載せ、毎月発行のB4判「図書館だより」には児童書を含め全新着本のタイトルを載せている。
- 町内ケーブルテレビでは、児童書を優先して紹介する。
- 閲覧室前に展示用パネルを設置し、「子どもの読書週間」の時期には、絵本作家や児童文学者の紹介展示を行う。
- 実践的な活動として続ける「おはなし会」開催は、図書館(文化会館)内では毎月1回であるが、活動の場を近隣の小学校にまで広げて行うようにする。ただし、毎年8月開催分は、会の規模を大きくし「おはなしコンサート」と名付けて、通常るときには参加できないような遠隔地の子どもの参加を促す。
- 年度の終わりから「子どもの読書週間」直前まで、ボランティア・スタッフへの謝意を込めて「おはなし会この1年」と銘打った各回の記録スナップ写真をまとめた展示を継続する。



## 図書室

- 子どもの読書活動を支えるため、資料の紹介や貸出、場所の提供など、読み聞かせボランティアグループ等の活動を支援していく。
- 子ども向けの蔵書を増やすとともに、児童・生徒が学習や読書に利用しやすい環境を整えていく。
- 本の貸出・返却の場としてだけでなく、親と子が本に触れ読書を楽しめるスペースを設け、安らげる場としての図書室にする。
- 図書室主催の企画展示やイベントを実施し、町民に地域の図書室として気軽に利用してもらえるようにする。

## (2) 美術館における読書活動の推進

### ① 現状と課題

地域の文化施設として、木にまつわる美術作品である木彫と木版画を収集・展示しているが、子どもたちの豊かな心を育み創造する力を養うためにも、美術館活動のみならず読書活動を推進している。

それらによって、地域住民の総合的な文化活動の向上に寄与し、子どもたちが身近に美術や本とのふれあいを体感できるよう、絵本に関する展覧会を開催するなど、多くの人により親しみやすい活動を行っている。

今後、美術館や公民館など活動の場を広げ、公共施設における活動の推進を目指したい。

### ② 取組

- 情操教育の向上を担う施設の役割を果たすために、引き続き絵本原画展及び関連事業を継続的に実施していく。
- 読み聞かせボランティアグループ等の活動を支援するために、絵本展等の充実やその情報を蓄積していく。



### (3) ボランティアグループにおける読書活動の推進

#### ① 現状と課題

おはなし会を開催しており、内容をより充実させるために、対象年齢、人数、時間、場所、行事、季節等を考慮するとともに、選書のジャンルが偏らないように、絵本（物語・科学）、（古典・新刊）、紙芝居、詩、パネルシアター、エプロンシアター、小道具を使ったおはなし、わらべうた、手遊び、人形劇等でプログラムを組み、「おはなし」の楽しさを伝えると共に、楽しいひとときを共有している。

読み聞かせや紙芝居は、既成のものにも優れた作品があり、それを使用することで手間はあまりかからないものがほとんどだが、手作りの紙芝居を作成するときは手間と費用がかかる。パネルシアターについても、手製の小道具をつくるために手間と時間がかかる。また、活動歴が長くなるにつれて、大道具小道具の類が増え、それらの置き場所に困っている。

今後は那賀町の民話や、ストーリーテリング、ブックトークも取り入れればと思う。ひき続き読み聞かせの講習会や研修会に積極的に参加したり、他のグループとの交流を続けながら、グループや、個人で研鑽を積む。今後も活動を通して、親子の絆、友だちとの絆、地域との絆を深めていくとともに、会員相互の和を大切に楽しく長く継続して、読書活動の推進に努めていきたい。

また、スタッフの数が数年来固定してしまっているため、活性化のためにも、スタッフの新加入が切望される。

#### ② 取組

○「読み聞かせ」「紙芝居」「パネルシアター」、この3演目を主なプログラムに採用しているが、それ以外の演目も取り上げていきたいと考えている。

例えば、語り手がホワイトボードに、手で簡略な絵を描きながら話を進めていく「絵描き話し」という新演目の採用。

○道具を一切使わず、手振り身振りにより物語を展開する落語の語りと同じような古典的手法の採用。さしあたり『那賀町の民話』に題材を求め、実行に移している。

はなしの題材は、こだわりなく幅広く国の内外に求めているが、一方でこの山間部の地域にふさわしいような話も加えたい。

○自主活動として毎月1回定例会、5年に1回おはなし会を、随時人形劇の稽古講習会、研修会、絵本作家の講演会等への参加。

○こども園、小学校、地域との連携をとりながら、絵本の読み聞かせはもとより紙芝居を通して読み聞かせを展開することで、子どもたちに積極的に読書を親しむ機会を多くもつように努める。

○新しい紙芝居の制作に取りかかり、さらに子どもたちへの関心を持たせるようにする。

### 3 こども園における読書活動の推進

子どもたちにとって大事なことは、乳幼児期に保育教諭と絵本を通して、心を通わせながらことばを習得し、友達と楽しい読書体験をすることである。

そうすることが、「ことばを学ぶ」、「感性を磨く」、「表現力を高める」、「創造力を豊かにする」ということにつながる。

子どもたちが、本に対しての興味を持つことで、読書習慣の形成へとつながり、本に触れる機会の充実が図られる。地域のボランティア団体や保護者とともに、幼児一人ひとりの実態を把握し、発達に応じた読書活動に取り組むことができる。

#### ① 現状と課題

日常の生活の中に、絵本の読み聞かせを取り入れ、日々の保育に、読み聞かせの時間を設定するため保育課程の一層の充実を行っている。子どもの身近な場所に、本のある環境整備、参観日には保護者による読み聞かせや園だより等により推薦図書を紹介などの情報提供を行っていることで、保護者が子どもと一緒に貸し出し絵本を選ぶ機会が与えられ、子ども自ら興味のある絵本を手にする姿が多くなっている。

今後は、園児が進んで読書活動に取り組める「絵本コーナー」の環境整備、充実が求められる。

幼児が絵本に関心をもち、本を開く楽しさを覚えるように、保育教諭の読書活動への意義と理解を深め、保護者・ボランティア団体・小中高等学校との連携協力による多様な取り組みを工夫している。

図書館を利用し、貸し出し絵本の活用や、おはなし会や、おはなしコンサート、支援事業等の事業に参加するなど、保護者との連携をとりながら本に親しみ楽しさを体験することを読書活動の基盤としている。

年齢の幅が広いので、年齢や発達に応じた絵本の選択や読み聞かせの研修等に時間をさくことが難しいが、読書（読み聞かせ）を通しての心の育ちや成長をしっかりと捉え、ゆったりとした環境構成の中での読書活動に努めている。

#### ② 取組

○地域のボランティアグループと連携し、読み聞かせやおはなし会などを行う乳幼児の読書活動の推進に関する理解や関心を広めるとともに、お話しや紙芝居だけでなく、手遊びや歌なども取り入れて、読書に親しむためのさまざまな機会を提供する。

○家庭への絵本の貸し出しや、園・クラスだよりを通じた家庭への啓発を行い、絵本を通して家族が触れ合う良い機会をつくる。保護者自身の子育てに対する自信にもつながる。

○読み聞かせの技術や、乳幼児が本に積極的に親しめる環境づくりについての、教職員の研修を行う。保育教諭による日々の読み聞かせを行うことで、子どもと教諭の間に信頼関係が生まれ、保育実践に大きな力となる。

○年間購読絵本について、子どもが興味・関心のある絵本、年齢にそった絵本を購入したり、絵本の部屋や絵本コーナーを設置して、いつも子どもの身近な場所に本のある環境を整え、子どもの好奇心・探究心が満たされるような絵本コーナーの充実を図る。

## 4 小学校・中学校における読書活動の推進

学校は、子どもが読書習慣を身につける、最も重要な場所である。身近に本のある学校生活を通して、読書が好きな子どもたちを育て、学校全体で読書活動の重要性を共有し、取り組んでいく必要がある。

また、小学校、中学校の読書活動の拠点である学校図書館の、さらなる整備に努めていく必要がある。

総合的な学習では課題解決の方法として体験学習が重視されているが、それが単に体験だけに終わってしまわないよう学習として成立させ、生きる力に結びつける。そのためには、図書を中心とする活字メディアを媒介にした活動が必要で、最も基本となるものが読書である。読書により、学習に必要な情報を活用する知識や技能を育んでいきたい。

### (1) 小学校における読書活動の推進について

#### ① 現状と課題

本を好きな児童は多く、読み聞かせを楽しみにしたり休み時間にも本に親しんだりする児童がいる一方で、実際に自分で読むことには抵抗がある児童がいる。

読む本を提示したり、読書の時間を確保してあげたりすると、楽しんで読む姿が見られるが、まだ読書が習慣となるまでには至っていない。

また、読んでいる本に偏りも見られ、図鑑やクイズ、漫画の本は好んで読むが、童話や小説等長い読み物はあまり読みたがらない児童もいる。

学級文庫が充実しているので、各教室で本を読む児童の姿がよく見られるが、図書館や学級文庫の本を借りて家で読む児童の数は少ない。

家庭でじっくりと本を読む習慣を育てていくことが必要で、今後は教科を通じて色々な分野の本を紹介し、児童が本を読むことに興味や意欲をもてるようにしたり、自ら知識を得るために本を探したり本の世界を楽しんだりすることができるよう、様々な機会を通じて働きかけていくことが重要である。

各教科等の学習活動はもとより、「朝の活動」の時間帯に読書タイムを取り入れたり、ボランティア団体による読み聞かせ等を行ったりして、読書活動を推進している。児童の本に親しむ態度は育成されてきてはいるものの、読書への興味・関心、読書量や読書時間等には個人差がみられる。

自分の思いや考えを表現すること、表現されたことを解釈し意図をくみ取ることなど、コミュニケーション能力につなげていくためにも、文字に親しみ、想像豊かに表現できるように推進していきたい。

#### ② 取組

○朝の読書の時間を設け、全校一斉に読書をしている。時には担任が読み聞かせを行うこともあり、読書に親しむ機会をできるだけ多くとるように心がけ、読書の興味・関心・意欲を高めるように創意工夫を重ねる。

○毎年、各学年に必要な図書を拡充していくように配慮し、学級文庫を充実させ必要な時にすぐ児童が本を手にとれるよう配慮する。

- 児童がよく利用する図書室を目指すという図書委員会活動の中で、本のもつ楽しさやおもしろさを伝えるとともに、読書の幅を広げるきっかけ作りとして「読書週間」等を設定し、図書委員が計画、工夫し、期間内に設定した課題を達成した児童には手作りのしおり、賞状等を送るなど、読書活動を喚起し、本とふれ合う機会の充実を図る。また、昼休みに図書委員が、絵本の読み聞かせを行う。
- 子ども新聞を広場に掲示して新聞を読む機会を設けたり、給食時に子ども新聞から興味のある話題を選んで放送している。週末の家庭学習に読書を取り入れており、図書委員が金曜日の放送や集会で本を借りて帰るように呼びかける。
- 校内の読書環境を見直し、図書室のみならず、教室、廊下等にも文庫を置くなど、本を手近に取れる環境づくりを行う。
- 図書室の図書選択は、できるだけ児童の意見を反映させる。児童に読んで欲しい図書については、意図的、計画的に準備し、種類の充実を図る。
- 毎学期、担任が読んでほしい本だけでなく、児童の興味関心や学習に関連のある本を選び、身近な手の届く場所の学級文庫に置くことで読書の機会を増やす

## (2) 中学校における読書活動の推進

### ① 現状と課題

生徒は「朝の読書」の成果で、読書に親しみ、読書の楽しさも味わえている。休み時間も読書をする生徒も多くなっているなど、意欲的に読書に取り組み、読書習慣を身につけることができているが、読んでいる本には偏りがあり、科学的な文章や論理的に書かれた文章を読むことに苦手意識をもつ生徒が多い。また、調べ学習において、十分に図書館を活用することができていない現状もある。

読書感想文発表会では、各学年数名の生徒たちからの本の紹介と、それに対する生徒の意見発表もおこなわれ、生徒の読書への興味関心につながっている。

ただ、中学校は、生徒も教師も放課後部活があるため、昼休みの短い時間にしか図書室を利用できないことがあるため、学級文庫を充実させ、本が読みやすい環境をつくることで、読書活動を推進していきたい。

また、司書教諭がいない小規模校においては、「図書館教育」という実務に携わる時間が取りにくい。地域との連携を視野に入れ、見やすく使いやすい図書室の分類整理を、今後の目標にしたい。

### ② 取組

○朝の読書の時間を設け、全学年で読書に取り組む姿勢を促す。

生徒は集中して読書に取り組み、生徒同士で本を薦め合う場面も見られる。

○読書への意欲を高めることにつなげるため、生徒にリクエストカードを配布し生徒の意見を尊重して購入図書の決定を行っている。リクエストカードの実施により、生徒の興味関心を把握することができる。

○図書の配置を簡潔なものとし、図書の整理整頓をしやすくすることで、見やすく使いやすい図書室を目指す。

○年に一度、書店の方に来校していただき、全教職員で図書の選択を行う。各教科担任に必要な図書を選択してもらうことで、各教科の学習に必要な図書を偏りなく購入することができ、教科学習の中で活用することができる。

○昼休みに図書委員が図書室を開け、貸出を行っている。学級文庫は、図書委員が選択し、30冊を学期ごとに入れかえる。そうすることで、読書に対する意識付けを行うことができる。

○読書感想文発表会を、全校集会で図書委員会が運営して行い、3名の生徒が読んだ本を持って全校生徒の前でその本の感想を述べる。発表の後で、聞いていた生徒からの意見発表もあり、生徒の読書への興味関心につながる。

○生徒会専門部（学習部）による運営として毎日、学校図書館を昼休みに開館する。貸し出しや返却をスムーズにできるよう、開館時間を守り、当番活動を積極的に行わせている。また、学校図書館に足が向くよう、本の整備や環境づくり、読書推進運動などを進める。図書だよりを発行する。

○学級文庫を設置することで、いつでも気軽に本を手にとることができる環境をつくり、本を大切にすることを日常的に学ばせる機会をつくる。

## 5 高等学校における読書活動

読書に親しむことで、多様な価値観・ものの見方や考え方を知り、視野を広げるためにも高等学校での読書に親しむ環境づくりは大切である。柔軟な考え方ができるようにし、想像力を養う。また豊かな表現に触れることで、漢字や語句などの語彙を増やし、最新の時事問題に関心を持ち、物事を深く考察し、自己の考えを持てるようにする。

### ① 現状と課題

1年生は新しく見る本に興味を持ちやすく、3年生は進路情報の収集や学習などで、図書室の利用が多くなる傾向にある。反面、2年生は1年生の頃に比べ、貸出が減少傾向にある。授業で利用する機会を増やすなど、一層の努力が必要である。

より効果的な広報をするために、専門的な技術の向上やその蓄積が不可欠であることや、家庭における読書活動を推進するために、保護者に対する啓発活動のあり方を再考する必要がある。入学後に行っている1年生アンケート結果により、生徒の読書時間そのものが不足していることがわかる。百科事典や全集が古く、新規購入したいが、高価なため予算不足で困難である。

学校生活の中で一斉に読書をする時間の設定が難しく、授業で図書室を利用するなど、教育の観点を重視しつつ運営するためには、司書教諭と教員が連携して、図書室へ足を運ぶきっかけを増やすことが必要で、そのためにも、「読書の生活化プロジェクト」を推進したり、本を身近な存在にするための活動やイベントを行っている。

選書の際に生徒や先生方の希望や意見に耳を傾け、より多くのニーズを知り、参考にする。委員会活動を活性化させ、生徒の読書活動に向けての啓発をする。進路関係の書物を充実させ、生徒達に紹介することにより進路選択の幅を広げていきたい。

### ② 取組

- 「森林クリエイト科」が設置され、自然科学や機械工学などの、専門性の高い蔵書が必要となっているので、積極的に購入していく。
- 県立図書館の「協力貸出」を利用し、不足している分野を補う。また、利用可能な図書などの情報を、利用者へ積極的に案内する。
- 学級文庫を充実させる。選書は、図書委員を中心に行う。朝の読書週間など、各活動を行う。また、ビブリオバトルを取り入れるなど、コミュニケーション能力を育成する。さらに、イベントを開催することにより、読書に興味を持たせる機会とする。
- 利用率の低い本は内容を吟味し、廃棄基準を満たした本は相談の上で除籍している。開架棚は明るい環境を保ち、本を手に取りやすい状態にしていく。
- 朝の読書週間、図書室でのイベント期間や長期休業時には、普段にも増して多くの生徒が図書室を利用している。読みやすい本を紹介することも、読書への良いきっかけとなる。オリエンテーション実施後は、1年生の貸出率が高い。全学年の貸出率を向上させるため、読書環境の充実を図る。



## 第3章 学校・家庭・地域の連携による子どもの読書活動の推進

### 1 学校・家庭・地域の連携・協力体制

- 子どもの読書活動の推進にあたっては、こども園をはじめ、地域、学校、図書館や読書活動推進団体、ボランティア、個人などが相互に情報交換や交流を通して、連携・協力することで、読書環境の整備を充実させている。
- 子どもが自主的に読書活動を行うことができるように、家庭、学校（園）、図書館等が一体となった地域ぐるみの取り組みを推進する体制づくりが重要なので、関係機関との連携をとりながら、読書活動の効果的な取り組みに向けて推進していく。

### 2 推進のための取り組み

- 家庭、学校（園）、図書館等が一体となった地域ぐるみの取り組みを推進する体制づくりが重要なため、「那賀町子どもの読書活動推進協議会」を設置し、推進状況や関係機関や民間団体等との連携策について、検討・協議を行う。
- 子どもの読書活動に関する講演会・研修会を開催し、関係者の連携強化を図る。
- 乳幼児健診時のおはなし会の開催、ブックスタート事業等の関係機関と連携した取り組みを行う。
- 子どもの読書活動を効果的に推進するために、関係機関・団体等から具体的な子どもの読書活動推進の取り組み方策や、先進的な実践事例に関する情報を広く収集し、リーフレットやホームページなどで情報提供する等、広報活動を推進する。
- 図書館を中心に図書資料やイベント、各種サービスに関する情報を提供する。子どもの読書活動に関する情報が、いつでも、どこでも利用できる環境を整えることが重要である。

### 3 数値目標

- 計画の実現に向けて目安となる数値目標を設置し、進捗状況にあわせて適宜見直しすることにする。

指標項目	現状	平成31年度目標
本を読むのが好きな子どもの割合	72%	80%

## 第4章 方策の効果的な推進のために

読書は子どもと地域と家庭を繋げ、読書を通じて子どもも大人もすべての人にとって明るい未来が広がります。

目指す姿の実現のため子どもの読書活動を推進するには、すべての子どもがあらゆる機会と場所において自主的に本と親しみ、本を楽しむことができるようにすることが重要です。そのためには、保護者を含めた子どもを取り巻く大人が、子どもの年齢や成長に応じて本と出会うきっかけを作り、読書活動の範囲を広げ、様々な読書体験ができるような環境づくりを推進することが必要です。

本計画を推進するため、家庭・地域・こども園・学校・町の図書館・ボランティア団体などが協同し、それぞれの立場で取り組むことはもちろん、徳島県や周縁の関係機関と協力・連携し、子どもの読書活動の必要性を町民に周知を行い、理解・実行してもらうため全町一体となって取り組みを進めます。